

# 北京オリンピック開催国における在外教育施設の役割とその取り組み

— オリンピック特別委員会の発起から子どもたちとともに学ぶ —

前北京日本人学校 教諭

熊本県熊本市立富合中学校 教諭 前村 恭 廣

キーワード：在外教育施設の役割，組織の起ち上げ，企画・立案・運営，交流活動，子どもたちの変容

## 1. はじめに

毎4年に一回開催される世界的祭典と言え「オリンピック」が思い起こされるであろう。2008年の夏，中国の首都北京を主な会場として，第29回夏期オリンピックが開かれた。

北京日本人学校は市中心部から少々郊外に位置しているが，周りは高層ビルや飲食・商業地区も点在し，大変活気のある地域にある。学校は小中併設の校舎のもと全児童生徒約700名が学んでおり，創立30余年の歴史と伝統のある在外教育施設である。

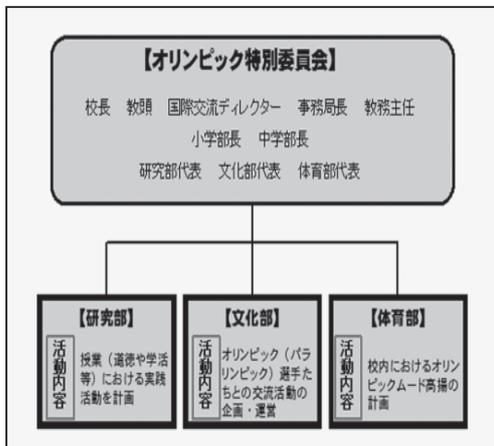
オリンピックが開催される年，まさに中国に在住している邦人，この北京日本人学校の児童生徒及び私たち派遣教諭にとっても，とてつもなく貴重な機会であるのは言うまでもない。このまたとない機会をいかに教育的な取り込みとして学校現場に生かしていけるのか，また在中邦人として日本人選手が集まるこの機会に何をすべきなのか，何ができるのか，いかにオリンピック気運を盛り上げて，児童生徒たちに関わりを持たせていけるのか…。そういう，いささか不安な気持ちを抱きながらも，熱い教育心を持って動き出した。

そこで，私たちは上記に関する取り組みを推進していきたいと集い「オリンピック特別委員会」を起ち上げた（当時，委員会の「文化部代表」として所属）。特別に今期だけに限った組織として校務分掌の中に組み入れてもらい，全職員の協力のもと学校全体としての取り組みとして動いてきた。前例のない取り組みだっただけに，全くの手探り状態からの始まりだった。以下にそこでの実践例をいくつか紹介していきたい。

## 2. オリンピック特別委員会について（組織図と会議計画）

学校組織の中で，主になる活動内容として関係の深い諸部で構成し，この年度内の短期期間の校務分掌として位置づけた。

それぞれの下部の中にも（小）オリンピック委員会が



回	月日	担当部	議題と内容
1	2月21日	全部	□組織作り □研究部・文化部・体育部の活動意義の確認 □北京オリンピックについての教員アンケートの分析
2	3月26日	研究部 文化部	□パラリンピックにからめた北京日本人学校特別支援教育計画 □出場が決まった日本選手への応援手紙の送付
3	5月7日	文化部	□競技団体への応援メッセージの送付計画 □北京オリンピック女子ソフトボールとの交流計画
4	5月12日	文化部 研究部	□競技団体への応援メッセージの送付確認 □北京パラリンピックに向けての道徳授業の呼びかけ
5	5月29日	文化部	□プロジェクトP(JOCジャパンハウスへの参加計画) □競技団体への応援メッセージの返事
6	6月30日	全部 文化部	□ジャパンハウスについて □パラリンピックについて □出場選手及び団体のオリンピック結団式への応援メッセージについて
7	7月9日	体育部 文化部	□ジャパンハウス参加の抽選方法について □ジャパンハウスの引率方法について □オリンピック選手へのプレゼントについて
8	8月25日	体育部 文化部	□北京パラリンピック観戦について (小1・2年)→女子車椅子バスケットボール (小3・4年)→水泳 (小5・6年)→女子車椅子バスケットボール (全中学部)→陸上競技 □北京オリンピック女子車椅子バスケットボールチームとの交流計画について
9	9月1日	体育部 文化部 研究部	□北京パラリンピック観戦について □北京パラリンピック女子車椅子バスケットボールチームとの交流について □北京パラリンピック観戦に向けての授業（道徳・学活）の取り組みについて
...	...	...	...

設けられるボトムアップの形態をとった。しっかりと練られた計画案を吸い上げてオリンピック特別委員会で再構築し、全体に提案して、最終的に学校全体として実施していく運びである。

それぞれの三部が独立しながらも、連携を図りながら、各部の目的・目標達成のために平行的、相乗的に進めていった。

### 3. 活動の実際（オリンピック特別委員会 各部の取り組み）

#### (1) 「研究部」の取り組み

①北京日本人学校障害者教育学習計画の作成（右表参照）

②障害者理解を深めるための授業実践の推進

パラリンピックに焦点を置き、各小学部・中学部における障害者理解教育の推進学習計画のもと、教材開発に努めた。それぞれの学年の実態と発達段階（聴覚・視覚・身体障害、肢体不自由、等）に応じた授業の創造を図る提案をしてきた。

③パラリンピック関連の情報・資料、教材の提供

授業で使用する関連の情報や資料の提供に努めた。

- パラリンピックについて、あるいは障害者理解を深めるために有効な資料の提供
- 上記に関するネットサイトの紹介
- アテネパラリンピックのDVD提供
- 書籍購入（「たつくといっしょに」「がんばれ！あかね」等）
- 「車椅子体験」学習の実施

月	小学部1・2年	小学部3・4年	小学部5・6年	中学部
6月 (道徳の授業は必ず行う)	道徳 絵本: たつくといっしょに  (他にも資料あり) 生活科・学活 中国語の手話を学ぼう(手話サークルあり)	道徳 絵本: たつくといっしょに 絵本: がんばれあかね  (他にも資料あり) 大地 中国語の手話を学ぼう(手話サークルあり)	道徳 絵本: がんばれあかね 乙武洋匡さん  (他にも資料あり) 大地 中国語の手話を学ぼう(手話サークルあり)	道徳 乙武洋匡さん ハンセン病  (他にも資料あり) 大地 中国語の手話を学ぼう(手話サークルあり)
9月	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">                     パラリンピック選手との交流 ～生き方について学ぼう～                 </div> ※車いすバスケット、ボールチーム、陸上・水泳・バスケットボール競技の観戦と応援活動			
	<交流学習の意義> ・体の一部が不自由なこと以外はなんら変わりがないことを知る。 ・くらしの中で大切にされていることやその人の生き方を知る。 ・障害者とのコミュニケーションなど、自分ができることを考える。			
	生活科 ・感想をまとめる ・手紙を書く	大地 ・感想をまとめる ・手紙を書く	大地 ・感想をまとめる ・手紙を書く	大地 ・感想をまとめる ・手紙を書く
10月以降	<発展学習として> ・聴覚障害者との交流 ・視覚障害者との交流 ・北京市盲人学校との交流			相手先などすべて未知名

児童生徒たちは、授業を通して、障害を持った人たちの生き様に感銘を受けた。そのひたむきさやたくましさ、懸命に取り組む力強さ・頑張りや生きようとする大きなエネルギーを感じ学んだ。

そして、これまでの日常の自分たちを振り返り「障害・障害者の方に対する偏見」「間違った見方」「差別的な言動」等について見つめ合い、以後、日常生活における意識・態度の変容が大いに窺えた。(後に車椅子オリンピック選手との交流やパラリンピック競技の応援観戦につながっていく。)

#### (2) 「文化部」の取り組み

①オリンピック・パラリンピック選手、団体とのつながりを求めた学校全体の取り組み計画立案

オリンピック・パラリンピック選手やその競技について、各クラスがインターネット等を使い、様々なことを調べた。その後、出場の決まった選手一人ひとりに宛てた「学び」や「応援」の手紙を書いた。

この後の選手たちとの「交流」を単に一過性のものに終始するのではなく、事前に学習をすることにより、その競技に対する関心が高まった。また、この後の「道徳学習」や「各種目観戦」へとつながりができた。

(ア) プロジェクトP ～「オリンピック選手に応援の手紙を書こう！」～計画

目的：北京パラリンピックに出場する日本人選手たちの応援・観戦を通して、これまでパラリンピックに関する学習を踏まえた学びとして、選手（団）の方々に手紙（コメント・メッセージ）を書いていく表現活動の機会とする。また、このことから、障害者理解の精神を養うこと、応援・観戦する日本人選手たちへ興味・関心を持つこと、そして、オリンピック同様にパラリンピックへの気運を盛り上げて参加意識を高めていくことにつなげていく。

活動内容：各応援・観戦学年単位で、それぞれの観戦競技種目団体（あるいは選手）に手紙を書く。  
※応援・観戦の際の各出場選手個人に宛ててもよい。→応援・観戦する日の\*「出場選手名簿」を参照

(イ) プロジェクトB ～「パラリンピック選手に心を伝えよう！」～計画

目的：北京に在住する邦人として、来中北京オリンピックに出場する日本人選手たちに応援や励ましのメッセージの手紙を書くことを通して、オリンピック気運を盛り上げ、選手たちに関心を持ち、オリンピックへの参加意識を高めていく機会とする。

活動内容：各学年のクラス単位で、担当団体や選手個人に応援や励ましの手紙を書く。  
※各団体や団体競技の中の各出場選手個人に宛てる。  
→事前学習の中で各出場選手個人名を調べ、手紙を宛てるクラス担当を決めて書く。  
(学級・他学年で割り当て担当以外の選手に自主的に手紙を書きたい児童生徒がいた場合、これも可とする。)

それぞれ上記の作品を小中各学年単位とするクラス担任がまとめ装飾したファイルを製作した。それを、東京で行われる結団式や、北京では知り合いづてに頼り、それぞれの各選手や団体に手渡ししていただいた。

その後、各選手や団体からお礼として「お手紙」「写真入り色紙」等をいただいた。児童生徒たちは、大変喜び、オリンピックやパラリンピックへさらに関心を持って選手やチームを応援し、また観戦にのぞんだ。

②オリンピック・パラリンピック選手、団体との交流計画企画・運営

(ア) 女子ソフトボールチームとの交流会（平成20年6月6日（金） 約1時間30分）

本校運動場を練習場として使用させていただきたいという要請もあり、この交流会が実現した。

第Ⅰ部…体育館にて

<開会>

- 1 選手入場（校長先導）
- 2 校長挨拶（チームの紹介含む）
- 3 選手によるデモンストレーション（上野投手のピッチングや選手のキャッチボール等）
- 4 質問・フリートーク  
(体育館フロアに拡がり各学年でブロックをつくり、その中に選手たち2～3名が入る)
- 5 激励のエール（ステージ上の選手たちに向かって、各学年約1分の創作エールを披露）
- 6 選手退場（運動場へ）

第Ⅱ部…運動場にて

- 7 練習風景の見学（キャッチボール・遠投、監督による守備ノック等）
  - 8 体験交流活動（上野投手の投げるボールを各学級1名の代表が打つ）
  - 9 児童会代表挨拶
- <閉会>



さすがエース上野投手の投げるボールは速く、子どもたちは感嘆の声をあげていた。しかし、交流の際には、ゆっくりと投げてください、ホームランを打つ子どももいた。さりげない優しさの一面を見せてくれた。

(イ) 女子車椅子バスケットボールチームとの交流会（平成20年9月5日（金） 約1時間30分）

☆全児童生徒でDVD（選手たちの試合やプレーの映像）を視聴…体育館

<開会>

1 選手入場

2 ・校長挨拶（チームの紹介含む）

・チーム監督による選手の紹介

3 監督の講話

4 ・デモンストレーション（車椅子選手によるドリブル・パス・シュート見学）

・交流（子どもたちもシュートの練習）

5 質問タイム（アットランダムな指名による）

6 各学年のクラスより激励の言葉やエール（同時に用意していた激励のプレゼントを選手に手渡す）

7 児童生徒代表お礼の言葉と花束贈呈（生徒会代表）

8 選手代表挨拶

<閉会>



体が不自由な選手たちとはいえ、車椅子を手で押し進みながらも上手なボールさばきと激しい車椅子同士の衝突、素晴らしいシュートの技に息を飲んで感激し、子どもたちは興奮の時間を過ごした。感想では、障害者に対する見方や考え方が良い方向に変わり、これまでの自分を振り返る子どもたちがたくさんいた。

③「JOC ジャパンハウス」参加計画企画

北京市中心部にある大手日系ホテルの大広間を借りて、オリンピック選手のインタビューや交流の場として設けられたスペースである。プレス関係が常駐しており、情報発信の場でもある。テレビでご覧になった試合前後のインタビューの風景は、ここから発信されたものが多いのではないだろうか。

入場人数制限や日本人であること等の制限はあるものの、（大変厳重なセキュリティーチェックのもと）一般の人たちも入場することができる。実際に、ここでいろんな発表活動や交流会の機会を与えてもらった。

以下、3回の交流会は児童生徒の参加希望が多く、結果、抽選で決めなければならない盛況ぶりであった。

(ア)「JOC ジャパンハウス」にてお披露目（平成20年8月11日（月） 約30分）

日本選手（団）応援にちなみ「八木節」演奏やオリンピックテーマ曲の歌唱を披露した。当時、小4年生約30名程が担当し、舞台上がって出演した。

(イ) 野球チーム・星野ジャパンとの交流会（平成20年8月17日（日） 約40分）

日本野球チームの健闘を祈念し、選手やコーチたちとの交流の中で応援を託した。オリンピックテーマ曲を歌唱を披露し、全校児童生徒で製作した勝利祈願の「千羽鶴」を代表・星野監督に手渡した。北京日本人学校小1～中3年生約100名程が交流会に参加した。

(ウ) 女子ソフトボールチームとの交流会（優勝お祝い）（平成20年8月22日（金） 約40分）

北京日本人学校に来校した際、優勝を誓った彼女たちが約束を果たしてくれた。そのお祝いに駆けつけ、交流の時間を持った。選手たちへの質問インタビューやオリンピックテーマ曲の歌唱披露。前回の来校交流写真の写真立てを記念に差し上げた。監督始め選手一同、喜びと感動で涙を流してお別れをした。

北京日本人学校小1～中3年生約50名程が交流会に参加した。



(3)「体育部」の取り組み

①北京オリンピック・パラリンピックに関する啓発活動

オリンピック・パラリンピックが開催されるという意識の向上と雰囲気の高揚を図り、児童生徒の視覚的・聴覚的・接触的…、5感に訴えかけるような取り組みを行った。校内はオリンピックの雰囲気一色になった。

- オリンピックキャラクター縫いぐるみやオリンピック開催までの「カウントダウン」ボードの設置
- メイン廊下への大展示・掲示物
  - ・北京市内の大地図に各オリンピック会場及び種目紹介
  - ・全学級がオリンピック選手・団体に贈った激励の色紙（上述「プロジェクトP」）の掲示
  - ・「プロジェクトP」に対する選手たちからの贈り物（サイン入り色紙、写真、ユニフォーム…）の掲示
  - ・女子ソフトボールチームとの交流会の写真を掲示（選手の紹介）
  - ・大手新聞社からいただいた拡大新聞コピー（オリンピック期間中のスクープ記事内容・写真等）
- 放送による紹介
  - ・弁当時間に放送委員企画による「オリンピッククイズ」や「オリンピックテーマソング」等の放送



## ②「JSBオリンピックだより」の発行

新年度からパラリンピック応援観戦の取り組みの活動期間9月までに、月2～3回の割合で家庭向けに発行した。

内容は、学校における児童生徒のオリンピック（パラリンピック）への取り組み、選手たちとの交流、そして、我々委員会の取り組み予定・話し合いの紹介等、幅広い観点で興味あるおたよりを出すことができた。

各家庭に取り組み等のお知らせをすることで、活動への理解や協力・支援を得ることができ、同時に家庭をも含む啓発的な活動として位置づけることができた。

## ③「JOC ジャパンハウス」参加連絡調整

委員会とジャパンハウスを担当する企業との窓口としての役割を担い、各部からの意見集約を伝えてもらったり、逆に各部へ連絡内容等をおろしたりした（参加内容計画を運営する文化部は、並行的に密に連絡を取り合う協力態勢を維持していた）。 \* 「JOC ジャパンハウス」上述参照

**JSBオリンピックだより** 北京日本人学校  
校内オリンピック推進委員会  
2008. 6. 28 NO. 3

女子ソフトボール日本代表チーム来校

保護者の皆様には、日頃、本校の教育活動にご理解ご協力をいただきありがとうございます。

さて、6月の行事予定表にてお知らせしました通り、某月の5日から8日までの4日間、女子ソフトボール日本代表チームが本校を練習会場として使用します。

女子ソフトボール日本代表チームは、アテネオリンピック3位となり、一昨年に北京で開催された第11回世界女子選手権大会では準優勝と世界でも輝かしい戦績を誇っています。そして、ここ北京では銀メダル獲得を目指している注目選手が揃っています。

日本子どもたちが憧れているとあって、交流会が開催されることになりました。小学朝児童会を対象に行われる交流活動について紹介したいと思います。

まず、練習では、選手の方々と相手を迎えた後、児童がオリンピック選手のすばらしさを目の当たりにできるように、選手の方々のピッチングやキャッチボールの「デモンストレーション」を計画しています。その後、選手の方々への質問コーナーを設けています。北京日本人学校からのプレゼントとして、選手たちに各学年で工夫した「エール」を贈り、北京オリンピックでの大活躍を期待したいと考えています。

その後、場所を校庭へ移し、選手たちの練習風景を見学します。さらに、代表児童による体験活動を計画しています。体験活動では、選手の方々が分給につき、各学級から選出された代表18名が順次バッターボックスに立って、オリンピック選手を相手にホームランを目指して打つという活動を考えられています。

なお、当日は、女塚等の都合により保護者の皆様のご参加はご遠慮いただきたいと思います。また、この週末の来校はできませんのでご承知おください。よろしくお願いたします。

**ソフトボールの魅力**

ソフトボールの数字は正確で機械計らる約100キロのボールを投げます。その正確な数字と機械計らるボールの特性、セーフティバント、全力投球ヘッドスライディング、盗塁エンドランなどの運動力が次々と目まぐるしく繰り返されます。そんな今のプロ野球に求められているような1塁を争うスปีド・パワーでスリリングな運動がソフトボールの最大の魅力です。

## 4. さいごに

北京以前にオリンピックが開催されたアテネ、そして、シドニーにおける在外教育施設日本人学校の取り組みを参考にしたいと、各学校に連絡を取ってみた。しかし、残念ながらアテネ日本人学校は閉鎖、シドニーでも教職員は2～3年で入れ替わる現状から、その詳細は得られなかった。また、JOCに連絡を取るも、取り組み事態の要望やあり方等のご教示はいただけなかった。全くの無（ゼロ）から始めた、暗中模索の取り組みであった。

しかし、今回の取り組みを、その国々の現状・実情、状況によってそれらも異なってはくるものの、在外教育施設在邦人としてできること、やれることのベーシック・サンプルとしては残していけるのではないだろうか。

次回、3年後に開催される「ロンドン・オリンピック」とその「パラリンピック」、あるいはこれ以後、オリンピックが開催される地域に派遣される教員の方々にとって、少しでも参考にさせていただけると幸いです。

実際に、これらの取り組みで子どもたちは大きく変わった。学校の日常生活における言動・行動に良い変化が窺われる様になった。とにかく理論より行動から始めた訳だが、我々も実践してきた成果を大いに実感している。

是非、これからの取り組みを通して、子どもたちが人生の糧として役立てていくこと、そして、在外教育施設での輝かしい素敵な追憶の1ページとして、いつまでも心の中に生きていくことを願わずにいられない。